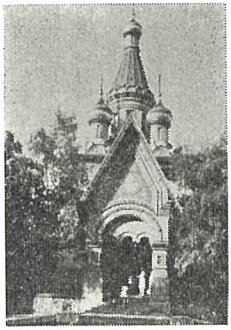
東欧見聞録

秦　芳江



今年の夏、ベオグラードにちょっとした用事があったのを口実に、一月あまりドナウの岸辺をぶらついて、民謡やらダンスを採集してきた。

今回は二度目の東欧訪問なので、どうやら落ついていたのと、全く私的な旅行なので、勝手気ままが出来たせいか、予想外の経験と楽しい収穫が多かった。わたくしの友人たちにいわせたら、甚だ感覚的な見聞ね、といなされそうだが、今後その方面に出かけられる方々のために、敢えてその一端をご紹介する。

レニングラードにて

革命五十周年の準備で大童のモスクワからレニングラードへ、一昨年より、インツーリストのサービスも少々スピードアップした

し、第一、トイレの紙が上等になったわ、などと思いながら、エルミタージュ美術館前の公園を歩いていると、赤ん坊を抱いて黒い頭巾をつけた、一見、小数民族風の婦人が数人よってきて、何カペイクでもいいからとつきまとわれた。大体、こんな物乞いは、今までソビエト国内では見かけたことがなかったので、びっくりして立止っていると、実に困ったような顔つきをして追払ってくれた青年がいた。ついでに、ネフスキー通りの一般食堂へ案内してもらって、行列をしながら彼の話を聞く。見かけが老けているのは、東ベルリンに兵隊に行っているうち、反戦思想のかどで数年投獄されていた由、英語はその時覚えたとのこと、現在は工科大学の学生である。

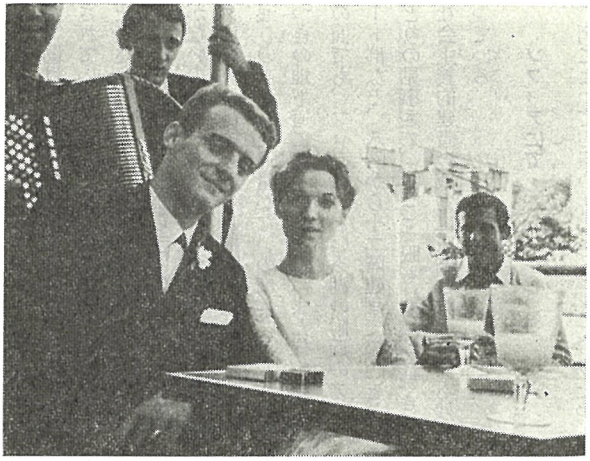
オレッグ君曰く「日本の若者は、ほんとうに軍備のない平和があると信じているのだろうか、僕らにとっては夢のような話だが。」冷たいクバスの泡の中で、彼がそっと呟いたのを、わたくしは聞き洩さなかった。

ベオグラードにて

ベオグラード、白い街、いよいよチトー大統領が中東問題の調停に乗出したというニュースでみんな興奮しているようだ。

ホテル・スラビアの七階から顔を出すと、遙かにドナとサバ河が光って、風に乗って陽気なコロの音楽が流れる。音につられてテラスまで降りると、今や結婚式の真最中、胸に小さなやどり木の飾りをつけた新郎と花嫁、親類縁者相寄っての飲めや歌えの大宴会である。「カコステ（こんにちわ）写真を撮らせて

ね」「オー、ヤボネ！ヤポンカ！　よく来たね、みんなと踊らないか」というわけで、ヘイ・タネツ！　と声をかけながらすてきに速い輪踊り、パルチザンの生き残りという新郎のおやじさんが、声をはり上げてダルマチアの唄を歌う。クロアチア人もセルビア人も、モンテネグロの人も踊る、踊る。きけば、新郎が南仏へ出稼ぎに行って連れて帰ったインポート花嫁さんであるとか、頼まれて〝しあわせだナア〟という上等な日本語を教えてあげたら、出席者全員が「しあわせだナア」と大合唱、泡立つ新しいワイン、うれしそうな二人の顔。



ベオグラードの結婚式

でも、はるばるフランスから一人ぼっちでつき添って来たらしいお母さんの手が、テーブルの下で、娘の手をしっかりと摑みながら細かく震えているのに気がつくと、何だか胸が迫って来て〝お母さん、気持わかりますよ〟って背中を撫でてあげたのを覚えている。

ブクレシチにて

東欧圏では、英語はほとんど通用しないということは覚悟していたが、それでもこの国ではほんとうに弱った。第一、空港の案内所へ行っても、アイ・アムといいかけたとたんに「オ・ララ、パルドン」と逃げられてしまうし、大きなホテルでも英語のわかる使用人はほとんどつかまらない。さすがに東欧の小パリと名乗るだけあって凱旋門もエトワールも小規模ながらあるね、と感心するよりさきに、簡単な手続きやら交渉やらで往生したものである。他の東欧諸国でもそうだが、生じっかロシヤ語の単語など並べると、分かっているくせに妙な顔をして敬遠されてしまうし、どうやら旅行者としてはフランス語が第一等人種、次がドイツ語、イタリー語の順らしい。

さいわいに、わたくしの職業柄、身体動作による表現法がずばぬけてうまい（と思っているだけです、失礼）のと、ご婦人のひとり旅なので、いつも誰かしら世話焼き屋の紳士が名乗り出て来るので、何とかピンチを切り抜けることが出来るのだが——それにしても第二外国語がもっと話せるようにならなければと、いつもながら痛感させられた。

さて、ルーマニアは東欧諸国の中でも、ただ一つラテン系だそうで、顔立ちもスラブと違い浅黒い感じで、全体としてはひどくくすんだ印象である。また金の義歯の人が多くて、日本の田舎のおじさんのような人も見かけたが、若い娘はしなやかで黒い服の美人が多い。そのひとり、エレーナというお嬢さんとダニューブの漣ならぬ大波の立つプールで泳いだ後、わたくしの化粧品が珍らしがられ

て、この次はもっと持ってきて、と催促された。聞けばこの国でも口紅やクリームは製造されているのだが、彼女たちの魅力的な眼もとをさらに引立てるアイシャドウやマスカラは、ほとんど旅行者から手に入れるより仕方がないのだそうである。それにひきかえ、ブクレシチの目抜き通りの横断歩道は、今出川通りの半分も交通量がないのにエスカレータつきの地下道になっているし、また住宅建設の面でも、フロラスカという湖の附近のアパート群など、八階から十二階建までの色とりどりの見事さで、それこそ眼もはるかに続き、社会主義的建設の威力に圧倒された印象も残っている。

ソフィアにて

例によって宿屋の予約もなしに降りたった。こんなに鄙びた簡単な空港も珍らしい。

ところが、ここ二、三年来、東欧は新しい観光地として人気が出たとやらで、数少いホテルは、仏・伊等の観光団で満員、昨年に較べて宿泊料も倍になったとのことである。それにソ連の旅行者、ウクライナやコーカサスあたりの田舎のおじさん、おばさんの団体がやたらに多くて、仕方なく、バルカン交通の社員宅に民宿させて頂いた。一泊三ドルくらい、ご主人のクリステッチ氏三十二歳、月給二万六千円奥さんと三つの男の子とで二DKのアパート、この国の家賃は平均して月収の六分の一程度ということである。民宿をさせるくらいだから、多分模範的な家族でもあろうが、実に親切な暖かいもてなしを受けた。

昨年の休暇には、自家用のチャイカで黒海まで泳ぎに出かけたそうである。ただし奥さんは働いていない。ここ東欧では社会主義国であっても、意外と職業を持っている主婦は少いようだ。それに子供の数が、都市では一人か二人、田舎でも三人くらいと聞かされたのも案外であった。

この家庭では一週間ほどいっしょに生活して、みんなからサシャ（私の名前はそうなるのだそうです）と呼ばれながら、ブルガリアの民謡やら、青い松かさを入れたジャム、ケパプチェタという焼肉だんごのお料理などを教えてもらった。

ベオグラード市外アバラ（無名戦士記念塔）

この国はさすがに香水と果実の国だけあって、蕾のうちに匂うバラ、地をひきずって鈴なりの杏や梨が見事であった。また市街の面積の半分以上を占める広大な公園には、黄昏時になると大勢の市民が集って来て、ぶなの葉陰のレストランで飲んだり歌ったり踊ったりしている。公園の楽団といえども、この国の人々の高い音楽性を反映してか、非常に素晴らしい演奏家ぞろいである。曲目はスラブ

の哀愁に溢れた民謡、チャルダスの旋律、またはウィンナワルツ、イタリー風のタンゴ、たまには〝黒いオルフェ〟やら〝天使のトランペット〟等のヒットナンバーもサービスしてくれる。曲の繰り返しは期せずしてみんなの大合唱となって、それが実にすばらしい三重唱、四重唱のハーモニーをかもし出し、輝く星空の下を流れてゆく。

クリステッチ氏の家族に限らず、ソフィアの市民の生活はすべてこの広大な公園に直結しているようである。若い恋人たちはもちろん、こどもたちは豪勢なプールやサッカー場に、そして年老いた人は木陰のリスとともに夏の日を楽しむ。そしてまた、誰かれとない話しかけと挨拶、改めて緑地の乏しい日本の都市と、それ故に閉鎖的、かつ商業的になっている家庭のレクリエーションのあり方に思いをいたらせられた。

この国は日本の在外公館もなく、日本の旅行者もほとんど訪れていないのにひどく親日的である。理由としてはたぶん、第二次大戦中枢軸側に立っていて、アメリカ軍の爆撃でひどい目にあっているからかとも思えるが、かなり年配の市民から、大戦中にソフィアに駐留していた日本の在外武官の方が、非常な人格者であったことなどたびたび耳にした記憶もある。

また今日では、若い人たちの憧れの的であるソニーとホンダをつくり出した工業国として、まれなインダストリアルな才能を持った国民として、大いに尊敬しているという讃辞をしばしば聞かされたものである。

ニッポン紳士について

最後にひとこと、何かの機会にと考えていたのだが、旅先でお見うけしたいただけない紳士方について書かしていただこう。

おひとりの時は判で押したように難かしい顔をして、ベンチの端っこの方で用もなく手帳など見つめていらっしゃるのに、二人以上になると、とたんに辺りがびっくりするほどの大声で笑ったり騒いだり、きまりの悪い思いがする時がたびたびであった。

ユーゴの劇場では、さる高名な政治家の一群が上演の途中にもかかわらず一斉にご退場、後にいたアメリカ人がびっくりして、〝いったい彼らは何者であるか〟と訊ねられたし、また、ある組合の幹部とおぼしき紳士連が、実に下品な日本語でその国の女性を批評しているのも耳にしたこともある。また一層ひどかったのは学生らしいグループ。チップをごまかした話、買物をして金を払わなかった手柄話、娘さんのあとをつけてお袋さんと喧嘩した話、いやもうたいへんであった。

キエフで頼んだ大学生のガイド君が〝この国に来ても、女性のいる所に案内しろ、という日本人がいる〟と大憤慨していたし、現にわたくしの体験でも、ある空港の待合室で、朝から赤い顔をして普通のお嬢さんにからんでいた東京の某区会議員を見かけたことがある。

それほどでなくても、エレベーター等でこちらが日本人だと分ると、じつにいやそうな顔をして先に乗せてくれる紳士もいる。「どうぞお先きに、無理をなさらないで」と申し上げるのだが——。

「日本の女のひとは、男のひとと人種が違うのですか?」これは東欧のある国で耳にしたことばではある。—あしからず—

（女子大学助教授・体育）

教育の中の創造活動

遠藤汪吉

児童心理学者は子供の遊戯の中に、模倣遊戯と創造遊戯のあることを指摘している。何なにごっこという遊びは、それぞれ実生活のモデルがあって、それを真似して遊ぶ模倣活動である。これに対し子供が自由に創作し、思いのままの形を作って遊ぶ積木、粘土遊び、自由描画などが創造遊戯であって、構成遊戯とも言われる。

模倣と言い、創造という精神活動は共に人間の本性上の活動であり、欲求に準ずるくらい強い、共に正常な形で充分伸ばしていかなければならない。そして是等のはたらきは、児童期や少年期だけで終るものではなく、生涯を通じていろいろな形で常に続いているものである。教育の中にもこれら二種類の活動をあてはめることが出来る。

正課、つまり教室や校舎の中で、教師が特定の教科書を使用して教える授業形態は、知識や技術の正確な授受を目的とし、そこにこそ教育の効果を期待しているのである。義務教育と言われる教育期間は正にこの種の模倣活動の最適な精神年令期にあることを前提していると言えよう、わが国において戦後中学校三カ年を義務教育期間として加えたのであるが、戦前六ヵ年の小学校教育だけを義務教育期間としていたこととくらべるならば、この変化は、児童心理学、教育心理学から見るときわめて重大な、そして基本的な改革であるといわなければならない。このことは逆に言えば、児童少年期において創造活動を教育的におこなう機会を三カ年おくらせたということになるのである。

このような教育の事情は、当然、高等学校、大学へと学ぶ青年期の生徒学生の創造精神を発育不全におわらせることにつながっていると言えよう。

今世紀六十五年間に、物理学と化学の領域でノーベル賞をもらった人々の受賞時の平均年令は、前者で四十七歳八カ月、後者で四十九歳と計算される。これらの人々がノーベル賞に該当する業績を最初に手がけた年令が何歳であったかを遡って確認することはむづかしい。けれども学問的な経歴や、個人的な伝記等によって一般的に言えることは、その創造的な精神が具体的にはじめて現われたのは二十歳台であろうということである。

このようなことを考えると、現在の新制大学という制度の中で、もっと創造活動を伸ばすために指摘することができる若干の問題点に気づくのである。

現行の大学制度の中でもっとも創造的教育活動ができるのは演習科目であろう。演習の

やり方は担当教授によっていろいろであるが、何れにしても演習のクラス規模が小さいことが共通の条件である。この点で本学の現状は必ずしも満足できないのは遺憾である。

第二の問題点は、現在の私立大学の設置現碑が科目主義に拠っていることである。科目主義は教育内容に予めある程度の教授内容の枠をはめられる弊が生じやすい。同時に場合によっては科目羅列的となっていたずらに断片的な知識授受に陥りやすかったり、教授内容の新鮮さを失い、動脈硬化を将来するおそれがある。

最後に新制大学制度が強調している課外活動が創造活動よりむしろレジャー化する傾向が多くなりつつあることである。

これらの問題点以前尚挙げれば多くのものがあろう。もちろん大学においても正課の教育がたとえそれが模倣活動を多分に要求していることを認め、しかもこれを軽視するのは当らないと思う。ただ本学のように中学校から一貫教育を強調し、それを実現し得る条件のある学園では、他の大学に比しもつと創造活動を伸ばし得る工夫を一そう積極的にすすめることが望ましい。

（文学部教授・心理学）

同志社女子大学

——学生募集——

募集人員

学芸学部	英文学科	250名
	音楽学科	25名
家政学部	家政学科	50名
	食物学科	100名

第一類

願書受付　1月9日(火)—1月30日(火)
郵送受付　1月9日(火)—1月27日(土)
試験日　2月5日（音楽学科は2月5、6日）
試験科目　英文学科——外国語(英語B)
音楽学科——楽典、音楽実技
家政・食物学科——理科
（物理B、化学B、生物のうちより1科目選択）

第二類

願書受付　2月21日(水)—3月4日(月)
郵送受付　2月21日(水)—3月2日(土)
試験日　3月8日（音楽学科は3月8、9日）
試験科目　全学部学科共通
国語（現代国語、古典乙1）外国語(英語B)
理科（物理B、化学B、生物のうち1科目選択）

試験場所　同志社女子大学

＊入学試験要項　1部150円（送料とも）

＊　＊　＊

同志社女子大学入学試験事務室

ベトナムの子供たち

中村　遙

ベトナム政府の児童問題についての責任者であるヴェン・ギア氏と会見したのは八月三日の午前十時過ぎであった。日本国大使館の通訳を入れて、督学官のヴオ・フーカン氏も一諸に戦災孤児の問題について話合った。

ギア氏の言葉によればベトナムは、戦争を始めてから孤児が六万人できた、と。ベトナムで戦災孤児とは父親が戦争で死んだ児童の総称である。母親は達者で働いている場合であっても、父親が戦死したら戦災孤児に数えられている。

一

サイゴン市は米軍と南ベトナム政府軍でゴッタ返している。サイゴン河には西ドイツの病院船が浮かんでいる。二百人の傷病者を収容することができる。巨体をサイゴン河の桟橋に横づけにしたまま浮んでいる。西ドイツから南ベトナムへ現物給付の一つである。日本国大使館は、病院船から三百メートルほど下流に三十メートルもある広い道をへだてた町角に陣取っている。ここで日の丸の旗を見るのは誠に頼もしい感じがする。日本人会の事務所のある建物は、日本大使館の隣りである。そのビルには日本の商社の事務所も多い。三十年も以前、ベトナムに来た日本人にとっては唯一の祖国日本のなつかしい想い出を語る場所でもある。

昨年ベトコンに爆破された水上レストランは、ここから二百メートルほどはなれた場所で、サイゴン河に突き出した、まるで桟橋のような形で河の上に浮かんでいる。このレストランはサイゴン第一の豪華な作りである。ベトコンは橋げたに爆弾をしかけて、満員の時にドカンと一発食わせた。多数の死者が出るのも道理と言えよう。この辺は河岸が小公園風で河に添うて露店が多い。ここで腰かけてサイゴン河の景色を見ながら食事するのも面白い。バナナ一本が日本金で二円から三円。昼めしを食べても七、八十円。豪華な水上レストランでビール一杯百円。同じものが米軍専門のバーで六百円から七百円。

ベトナムでは、ベトナム価格と米国価格と二重になっている。もちろん、米国価格は、四、五倍も高い。それでも米国兵士はベトナ

ムの酒場では召し上がらない。テロが恐いからである。サイゴンではベトコン側か、現在の中央政府側かということは実に重大問題である。このことから幾つものテロやリンチが行なわれている。それでもサイゴン市民の表情は思ったより明るい。

バナナ市場で働く子供（小林金三著「ベトナム日記」より）

一つには戦争なれをしていることである。ベトナム人民にとっては、この戦いはフランス政府に統治されていた時代からの続きである。今一つの理由はベトナムは食糧に困っていない。冬期のない土地柄の優位が十二分に生かされて、悠々と抵抗しているようにさえ思われる。もちろん、このことにも必ず限度があろう。幾ら主義主張のためとはいえ、非戦闘員の婦人や子供が今のような状態で永久に放置されてよいかどうか。すこぶる問題である。戦争だからとはいえ、双方が相当惨ぎゃくなことをしている。

田舎にいけば子供たちは往来で丸裸でオヘソもチンチンも丸出しで遊んでいる。ヤシの木の下に手製の家を建てて、バナナでも食べておれば生物的には生きていけるのがベトナムである。しかし、そこには幾多の人道的な問題が残る。

二

施設に収容されているのは戦災孤児たちのほんの一部分に過ぎない。サイゴン郊外のアディン省の国立孤児院では、約八〇〇人の戦災孤児を収容している。施設は四十年も以前にカトリックの尼さんたちが老人ホームとして建てたものである。敷地は三万坪ほどでヤシの木の中にある南国風の建物である。建物は男子寮と女子寮に区分されているが、集会所や食堂及び遊び場は一諸である。一階建てで寮舎制。一棟に七、八十名は収容できる。ちょうど午後一時の昼寝のときに訪問したので、男児のほとんどが行儀よくベットの上で寝そべっていた。窓の外は見学の人で騒々しい。それでも子供たちは定められた時間には自分のベッドで午睡である。女児たちも大部分、午睡であったが一部は洗濯していた。

電気洗濯機のないベトナムでは、韓国風に衣類をベタベタ木片でたたいていた。ビシャン、ビシャンという異様な音が郊外の施設の静けさを破っていた。十二、三歳の女児たちが集団的に鼻歌まじりで木片をたたく音はヤシの木の梢にとまっている小鳥を驚かせている。ここでも近代文化に恵まれた日本の有難さを痛感せずにはおられなかった。

来年四月には、収容児童の数は一二〇〇名に達すると尼さんから説明を聞いた。

八〇〇名の収容児童を二十二名の尼さんたちで世話している。施設には小・中学校も附

設されている。施設の子供だけが学ぶための学校である。二十二名の尼さんが学校の教師の役もする。夜は施設のハウス・ペアレントでもある。食事から子供の衣類の世話までする。日本ならば百五十名程度の職員は、どうしても必要である。国立だが、一日十八ピアストルの食費を政府で負担しているだけである。この金は購買力では日本の八、九十円にあたる。何しろ、バナナ一本が二円の国だから。しかし、十八ピアストルでは児童たちの一日の食費だけである。収容児童たちの食事は朝がバナナである。昼食はカトリックのリリーフの食料、夕食は米の飯。米は一年に三回でも収穫することができる。粘り気の少ないバラバラの南京米だが、それでもバナナより上等だと思われている。

児童たちの遊具はもちろんのこと教材らしいものはほとんどなに一つ見当らない。しかし、施設の建物は、すこぶる立派である。カトリックの奉仕とフランス国民の献金でできた児童福祉施設である。フランス人は追出したが神父の残した宗教的な感化力は決してベトナムから追放されてはいない。追放することのできないキリスト教的信仰を、国民の心の奥深く植えつけたのが神父たちである。

ベトナムに昔から根を張っていた仏教は、今では三分されて弱くなった。これに反してカトリックの団結力と、信仰的影響力は決しておとろえてはいない。宗教の力強さを物語っている。施設は国立に移管されても仕事は、カトリックの尼さんたちに頼らねばならないのが、この国の児童福祉事業である。このことは他の分野における社会福祉事業においても同じことが言える。

一四〇〇名も収容している老人ホームが、サイゴン市の真中にあるかと思えば、まことに小じんまりした六、七十名の孤児たちを収容している児童施設もある。いづれもキリスト教的社会事業である。

三

カトリックの児童福祉施設では小・中学校を併設している場合が多い。この場合には施設は一部、学校の教室である。他の場所は児童たちの居間である。子供たちは三十人、五十人が組に分かれて授業している。公立の小学校は六年制で授業料なしである。私立の小学校は、授業料を徴集している。一ヵ月、日本金で五百円程度である。

カトリックで経営している学校は一般に市民の気受けも良くて、なかなか信用を得て入学希望が多い。施設で小・中学校を経営しているときは、この施設の保母さんが教師でもある。昼は小学校の教師で夜は施設の保母で

バスに寄ってくる物売りの子供たち（小林金三著「ベトナム日記」より）

ある。孤児たちの母親であり、また学校の教師である。両刀使いとは全くこのことである。

信仰的な奉仕の精神の充満している人たちでなくてはできないことである。生活の中に喜びを発見し、感謝しながら奉仕の業に励む信仰の人でないと、この重労働には耐えられない。この人たちには奉仕が楽しみであり、また喜びでもある。これこそ神に召された人生である。もちろん、施設には労働基準法はない。神の掟だけが支配している。

白衣の尼さんたちの顔は天使のように輝いている。信仰の喜び、奉仕することの喜びを教えてくれた人は、フランスの神父たちである。フランスはベトナムから政治的には退却したが、信仰的には今でも南ベトナムを、力強く前進しつづけている。

北爆の基地はサイゴンでもあるが、その他はバンコックの飛行場でもある。タイランドには米兵が、すでに多数進駐して基地作りに懸命である。タイランドとベトナムの間にはさまれているカンボジアは完全に北を向いてしまった。両国の国境はとざされてしまった。サイゴンとカンボジアの首都プノンペンを結ぶ最短距離の道路は米軍でかためている。カンボジアの飛行場には爆撃機らしい軍用機が何機もある。メコン河畔に堂々たる王宮を建てて鎮座している、シアヌーク元首は、何とか工夫して自主独立でいきたいのが真意であろう。カンボジアとベトナムの国境争いは今でも続いている。国連の政治機関が斡旋に出動している。米国が国連の座でカンボジアの優位を認めたら或は親米的になるかもしれないが？　目下、極めて微妙な時と言えよう。

物売りの子供たち（小林金三著「ベトナム日記」より）

カンボジアはプノンペンから五十キロも田舎にいくと、皮膚の色が真黒なインド系の人種が住んでいる。子供たちの裸体は、まるで墨汁でぬりつぶしたように黒い。黒光りとは、このことである。黒毛の水牛の背に乗ると、牛の毛色と少しも変わらない。それでも子供の表情は明るくて愛らしい。サイゴンの街中の水道端で、よく日焼けした子供の水遊びしている情景は、まことに南国的で情緒がある。

四

南ベトナムには親日的空気が強い。日常生活物資の多くは日本から輸出した品物である。石鹸一個、購入しても日本製品である。ベトナムで製造したものは今でも、余り良質ではない。日本の三級品でもベトナムでは一級品である。オートバイ、自転車、ほとんど、みな日本製品である。電気器具、写真機等はもちろんである。ガタバスはイタリア製で街中を走っている。日本の商社は、目下、売込みに懸命の努力を払っている。商品が日本から多く輸出されると、次第に日本語熱が

さかになる。サイゴン大学で日本語科があり、専修する学生の数も増加している。

児童福祉施設でも、米国に子供に行きたい児童もあるが、日本に養子にもらわれたい子供もいる。アディン省の国立孤児院でも、日本に養子にもらわれたいという子供が二人いた。名前はレチタン・スン、レチタン・テュイの姉妹である。姉は十二歳、妹は十一歳である。向学心があると施設長が語っていた。二人の娘は父親が戦死し、母親は生存しているが、二人の娘を残して結婚してしまったので二人の子供は全くの孤児になってしまった。

この施設に収容されている八〇〇名の児童の中、両親とも生存していない児童は総数の四分の一程度で残りは母親が生存している。母親たちと子供たちの面会日は毎週木曜日ときめられている。二人の姉妹も母親が面会にきてくれることを楽しみにしていたが、もはや、その望みはなくなってしまった。他の子供たちが楽しみにしている母との面会の日は今では二人の子供にとっては悲しみの日と変ってしまった。二人の娘たちは、パパと呼びママと呼ぶ人を求めている。彼女らは日本にそれを求めている。二人の姉妹の名前を手帖に記入して帰った筆者は、この子供のことについて責任を感じている。

目下、日本の里親制度は、戦後二十年近い年月を経ながらあまり進展していない。一時、六千人を突破した数字が、今では八千人台となったがその後、横ばい状態で余り伸びなくなった。里親になろうと志す人たちの多くは、児童たちの福祉を念願する心以上、自分のことを考えている。すぐれて良い粒を孤児たちの中に探しているのが里親の心である。児童たちの福祉を護るための愛情を、今以上に湧き出さすことが必要である。

南ベトナムでは、施設に収容されていない戦災孤児が四万人以上いる。北ベトナムでも同じことがいえよう。これらの子供のことを想うと胸が痛い想いでいっぱいである。

前線の米軍キャンプの近くをウロウロして米兵の残り物をもらい食いしている子供の数だけでも数千人に達している。これらの児童たちの人格形成について静かに祈りたい。神は決して一羽の雀であっても忘れていては下さらないことを信じて祈りたい。孤児たちの幸福のために祈りたい。

（校友・大阪水上隣保館長）

女子中・高校

—生徒募集—

〈中学校〉
募集人員　第1学年　235名（女子のみ）
願書受付　1月24日（水）
—2月24日（土）
入学試験日　3月1日、2日

〈高　校〉
募集人員　第1学年　45名（女子のみ）
願書受付　1月24日（水）
—2月14日（水）
入学試験日　2月19日

香里中・高校

—生徒募集—

〈中学校〉
募集人員　第1学年　150名（男子のみ）
願書受付　2月17日（土）
—2月26日（月）
入学試験日　3月1日、2日

〈高　校〉
募集人員　第1学年　200名（男子普通科）
願書受付　1月30日（火）
—2月10日（土）
入学試験日　2月15日、16日